日外会誌　126（2）：127 - 129，2025

誰もが輝ける外科の未来へ

中高年外科医（綺羅星）が輝くために

大分県外科医会名誉会長，うえお乳腺外科理事長
上尾　裕昭

内容要旨

若手の登竜門となっている大分県外科医会で，出番が無くなっていた中高年外科医が「後輩に伝えておきたいこと」を紹介する講演コーナーを新設した．熱意に溢れた講演は好評を博し，編纂された講演集は末永く後輩外科医に読まれ続けるであろう．

キーワード　中高年外科医の講演，講演集の編纂，地方外科医会

I. はじめに

大分県外科医会は昭和 35 年（1960 年）に誕生し，年に 4 回の定例会を重ねて 2023 年 12 月に 250 回記念誌が刊行された．3 カ月毎の定例会では 15〜20 題の演題が発表され，若手外科医は初めての発表を経験し，中堅外科医にとっては初めての後輩指導（スライドや口演原稿の準備）とともに座長を経験する機会となり，まさに若手外科医の登竜門としての歩みを続けて来た．

一方，壮年〜中高年に達した外科医は全国学会の専門分野で発表する機会は増えるが，大分県外科医会のステージに上がることは減り，地元で自分の仕事内容を紹介する機会が無い状況だった．

II. 中高年外科医に出番を

2017 年に大分県外科医会の会長を拝命した私は，県外の著名な講師による特別講演（60 分）を中断し，地元の中高年外科医 2〜3 名のミニレクチャー（20 分ずつ）を計画した．「遠くの著名人より近くの外科リーダー」のコンセプトの企画で，本会の理事会（6 月）での承認を得て，県下の中高年外科医に「若手に伝えておきたいこと，成功例や失敗例を話して下さい．」と呼びかけた．

初回（2017 年 9 月）のトップバッターは提案者の私が務め，30 年前（1987 年）に経験した「胃肉腫を疑った粘膜下腫瘍が消えた胃 vanishing tumor」の臨床経過と掲載論文を紹介．引き続き猪股教授（大分大学消化器・小児外科），杉尾教授（大分大学呼吸器・乳腺外科）が若き日の取り組みを紹介し，2 人の外科教授の講演に若手外科医達は聴き入った．

この日の熱気は 2 年間続き，このコーナーを楽しみに参加する若手外科医の数も増えた．“後輩のために自分の経験を紹介する”という熱い想いに溢れた講演 18 題（表 1）には，白石教授（大分大学総合外科・地域連携学），宮本教授（大分大学心臓血管外科），三森教授（九州大学別府病院外科）も登壇し，県下の外科系教授 5 名全員が揃い踏みしたシリーズとなった．

CONTRIBUTION OF INSTRUCTIVE LECTUTE BY SENIOR SURGEONS IN REGIONAL MEETING FOR YOUNG SURGEONS
Hiroaki Ueo
Honorary President, Oita Surgical Society President, Ueo Breast Cancer Hospital, Oita, Japan

表 1

(1)『胃噴門部腫瘤が消えた 1 例　～1987 年頃の経験～』 上尾　裕昭（昭和 49 年卒，うえお乳腺外科　院長）
(2)『腫瘍の局在が移動した直腸癌の 1 例　～2002 年の経験～』 猪股　雅史（昭和 63 年卒，大分大学消化器・小児外科学講座　教授）
(3)『人工心肺を用いた肺癌手術　～初めての心臓外科との手術：1995 年～』 杉尾　賢二（昭和 57 年卒，大分大学呼吸器・乳腺外科学講座　教授）
(4)『苦い思いをした術後上部小腸トラブルの 2 例』 白石　憲男（昭和 59 年卒，大分大学医学部総合外科・地域連携学教授）
(5)『高齢者・poor risk に対する局所麻酔下の手術経験 ～胃局所切除，乳がん切除（Bt+Ax），ヘルニア手術など～』 有永　信哉（昭和 54 年卒，酒井病院外科　副院長）
(6)『（データを）抱きしめて TONIGHT　～外科研究を志すに到った 7 つの選択圧～』 三森　功士（平成 3 年卒，九州大学病院別府病院外科　教授）
(7)『国立大分病院で作った 2 つの論文　～若い医師達へのメッセージ～』 是永　大輔（昭和 55 年卒，中津市立中津市民病院　院長）
(8)『私が外科医を選んだ理由と医療安全管理』 矢野　篤次郎（昭和 58 年卒，国立病院機構別府医療センター　院長）
(9)『外科医と緩和医療』 藤富　豊（昭和 52 年卒，大分県厚生連鶴見病院　臨床検査専従医）
(10)『外科医として若き時代に何をしておくべきか』 宮本　伸二（昭和 60 年卒，大分大学心臓血管外科　教授）
(11)『私の失敗を繰り返さないために』 本廣　昭（昭和 53 年卒，大分赤十字病院　院長）
(12)『長期に減圧療法を行った単純性腸閉塞の症例』 渡辺　俊治（昭和 52 年卒，日田中央病院　名誉院長）
(13)『たかが　アッペ　されど・・・　』 菊池　暢之（昭和 61 年卒　新別府病院　外科部長）
(14)『外科医から内科医へ　～モニター画面を見つめて～』 南原　繁（昭和 59 年卒，南原クリニック　院長）
(15)『型の如く　in the usual manner』 三浦　隆（昭和 63 年卒　新別府病院　呼吸器外科部長）
(16)『現在なら助けられたかもしれない十二指腸球後部潰瘍の 1 例』 荒巻　政憲（昭和 62 年卒，大分岡病院　副院長）
(17)『EBM の手法を用いて診療を行った 17 年前に経験した妊娠期乳癌の 1 例』 武内　秀也（平成 2 年卒，大分大学呼吸器・乳腺外科）
(18)『門亢症外科と内視鏡外科』 板東　登志雄（昭和 61 年卒，大分県立病院　がんセンター外科　部長）

III. 発表者の意気込みと視聴者の感想

久しぶりに大分県外科医会に登壇する中高年外科医が，プレゼンテーションの準備に張り切ったことは言うまでもない.「自分の外科医生活を振り返る良い機会になりました.」という感想も多かった．一方，聴講した若手外科医からは「□□病院の○○先生のプロフィルや専門領域を初めて知りました．○○先生の人柄にも触れたような気がします.」と言う感想が聞かれ好評を博した.

IV. 講演集の編纂

各講師の熱意がこもった講演内容の編纂は，大分県外科医会の中で自然の流れだった．論文形式ではなく A4 サイズのページの右半分にスライド，その左半分に説明文を並べ，Summary と講師プロフィルを含めて 3 ページに 1 題を収録した．講演集のタイトルは「中高年」という言葉に抵抗感のある人も居たため,「壮年外科医講演集～綺羅星の軌跡～」とした（写真 1）.

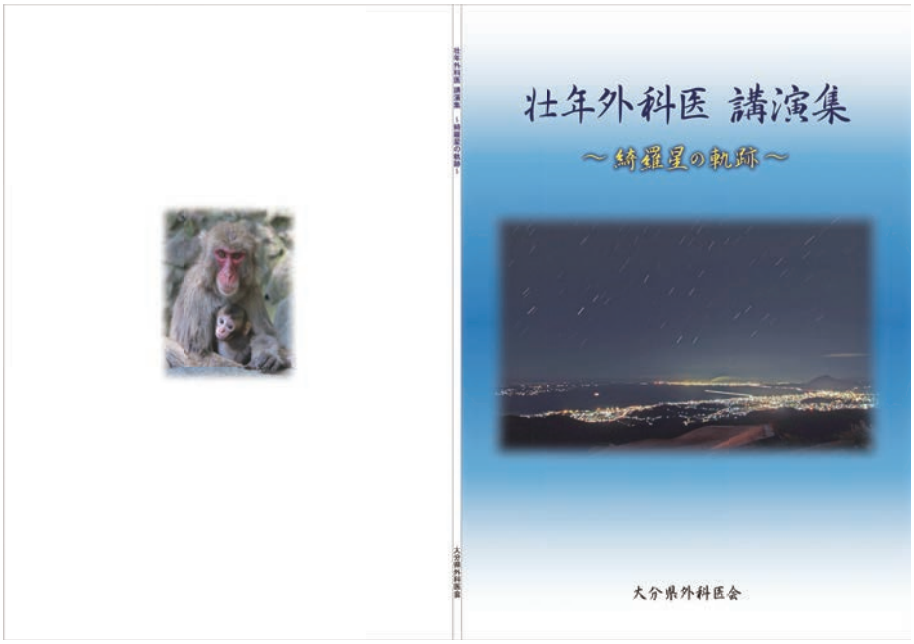

写真 1

講演集は大分県外科医会の全施設に配布して全会員が読めるようにした．また，本会は日本臨床外科学会の大分支部なので全国各県の支部長にも送付し，「自分の支部でも壮年外科医に焦点を当ててみます．」というメッセージをいただいた．

V. おわりに

私がダイバーシティ委員会に招聘された理由は「70 歳以上の外科医」としての“多様性”らしいので，どの地方会でも実現可能な「中高年外科医が輝いたミニレクチャー」を紹介させていただいた．このコーナーは一旦終了したが，現在の大分県外科医会（猪股雅史会長）では，「若手外科医へのワンポイントレクチャー」という形で，“地元の外科医”によるミニレクチャーが継続されている．

若手外科医もいずれ中高年になる．“後輩のために発表できる材料”を蓄えてもらって，次世代での中高年外科医・講演を期待したい．

利益相反：なし

Ⓒ Japan Surgical Society　Journal Web Site : http : //journal.jssoc.or.jp